




漢語音を表す満洲文字の翻字法について

中村雅之

1. 問題点

満洲文字をローマ字に置き換える方法としては、メレンドルフ方式が一般に用いられている。しかし、漢語音を表すいくつかの字母については、メレンドルフの翻字法があまりにも整合性に欠けるものであるため、多くの研究者は修正を加えて利用している。しかしまた、それらの修正のしかたは実に多様である。以下にピンイン「zi/ci/si」に相当する音節の転写について、いくつかの例を挙げてみよう。

ピンイン	「zi」	「ci」	「si」
満洲文字			
メレンドルフ ¹⁾	{dz}	{ts}	{sy}
河内良弘 ²⁾	{dzi}	{tsi}	{sy}
落合守和 ³⁾	{dz}	{tss}	{ss}
鋤田智彦 ⁴⁾	{dz}	{ts'y}	{sy}

これらの例を見ただけでも、転写に際して各研究者が銘々別個の方針を持っていることが窺えよう。以下、これらの混乱の元が何かということについて考えることにしたい。

2. 翻字と転写

一般に、表音文字をローマ字に置き換える場合には、字形を重要視して各々の文字(または構成要素)をほぼ一対一でローマ字に置き換える「翻字」と、表

1) Möllendorff, P.G. von, (1892), A Manchu Grammar with Analysed Texts, Shanghai.

2) 河内良弘 (1996), 『満洲語文語文典』, 京都大学学術出版会.

3) 落合守和 (1989), 「翻字翻刻《兼満漢語満洲套話清文啓蒙》(乾隆26年, 東洋文庫所蔵)」, 『言語文化接触に関する研究』1.

4) 鋤田智彦 (2007), 「『満文金瓶梅』漢字音表」, 『中国語学研究 開篇』26.

記している言語の音韻体系を考慮して、音声に復元しやすい形式にする「転写」とがありうる。この二つを厳密に区別するのは難しいが、少なくとも方針としていずれに重点を置くかという点は大きな問題となる。

もしも音韻体系を考慮した「転写」であるならば、ピンイン「zi/ci/si」がそうであるように、三つの音節の母音表記は同じ扱いになるはずであるが、上に掲げた四種の方式ではいずれもそのようにはなっていない。つまり、四人の研究者とも、立脚点は「転写」ではなく、「翻字」にあると考えざるを得ない。

「翻字」である場合には、当然もとの表記の形式をできるだけ忠実になぞるのが望ましい。つまり、ピンイン「ci」と「si」に相当する音節の母音を満洲文字同様に同じ表記とし、「zi」に相当する音節の母音と区別する必要がある。そのような翻字をおこなっているのが落合氏と鋤田氏である。(ただし落合氏は「ci/si」の母音を子音「s」で翻字している。)

3. {ts}と{ts'}

上の修正のうち、鋤田氏のみが「ci」に相当する音節の頭子音を{ts'}としている。これは、メンドルフの転写において、もともとピンイン「c」に相当する子音が{ts'}である({ts'a}{ts'e}など)にもかかわらず、中舌高母音と結合する音節(ピンイン「ci」に相当)のみを{ts}とする不可解な転写を修正したものである。落合氏の翻字では逆に{ts'a}{ts'e}などにおける{ts'}の方をすべて{ts}に修正している。

ところで、メンドルフの転写における{ts}(ピンインの「ci」に相当)には二種類の不可解さがある。その1は、{ts'a}や{ts'e}に用いられる{'})をなぜ中舌高母音との結合においてのみ省くのかということ。その2は、満洲文字で{sy}(ピンイン「si」に相当)と同じ母音が表記されているにもかかわらず{ts}には母音が表記されないことである。この転写があまりにも不可解であることから、{ts}という表記が実は単なる誤植だという可能性も考えられる。{ts}はメンドルフの転写表のわずか一箇所に表れるのみで、本文では確認できない。したがって、著しく整合性に欠ける表記{ts}が本来{ts'}ないし{ts'y}であった可能性を排除できない。

4. なぜ{ts'}なのか？

そもそもメンドルフはなぜ{ts'}という表記を用いたのか。この{'})は一見、

有気音を表示したもののように見えるが、恐らくそれだけではない。メレンドルフの転写で{'}'が付されるのは次の五種である。

{g'} ピンイン「g」に相当。母音{a}、{o}とのみ結合。

{k'} ピンイン「k」に相当。母音{a}、{o}とのみ結合。

{h'} ピンイン「h」に相当。母音{a}、{o}とのみ結合。

{ts'} ピンイン「c」に相当。

{c'y} ピンイン「chi」に相当。

最後の例では、ピンイン「ch」に相当する子音は一般に{c}であって{'}'を伴わない。「chi」の場合のみ、{c'y}となる。

以上の例を見れば、メレンドルフの意図は明白である。すなわち、満洲語になく、漢語のみに表れる音の標識として{'}'が付されているのである。{g'}{k'}{h'}の三例は、母音{a}{o}と結合する軟口蓋音が漢語のみにあり、満洲語にない(口蓋垂音が結合する)ため、{'}'が付されている。同様に{ts'}という子音も満洲語になく漢語のみに用いられるために{'}'が付されたものである。最後の例も、{c}は一般に満洲語にも用いられるが、中舌高母音との結合(ピンイン「chi」)は満洲語にないため、{c'y}として{'}'を付したものであろう。ただし、同様に満洲語にない{dz}(ピンイン「z」および「zi」)や{jy}(ピンイン「zhi」)などには{'}'が付されないから、{'}'には有気音の標識という側面も含まれているように思われる。

いずれにしても、メレンドルフが一般の満洲語表記と漢語専用の表記とを、転写において意識的に区別しようとしたことは間違いない。つまり、メレンドルフの{'}'にはそれなりの意図があるのであり、その転写を修正しようとする場合には、この点に留意する必要がある。

5. 翻字例

①メレンドルフに最小限の修正のみを施す場合

メレンドルフの{'}'を{'}'に修正。(これは入力 of 技術的な理由による)

メレンドルフの{ts}(ピンイン「ci」)を{ts'y}に修正。

②翻字に徹する場合

メレンドルフの{ts'}{c'}における{'}'を取り去る。

メレンドルフの{ts}を{tsë}、{sy}を{së}に修正。({ë}は満洲文字の字形が母音{e}の変形であることを翻字に反映させたもの。これについては

前稿⁵⁾を参照)

③「転写」に重点を置く場合

メレンドルフの{g'}{k'}{h'}{ts'}{c'}における{'}'を取り去る。

メレンドルフの{dz}を{dzī}に修正。

メレンドルフの{ts}を{tsī}に修正。

メレンドルフの{sy}を{sī}に修正。

最初の①は元の字形との対応が説明できない{ts}のみを修正したもの。②はメレンドルフからやや離れて元の字形との対応に重点を置いたもの。②においては母音{y}は{jy} (ピンイン「zhi」)と{cy} (ピンイン「chi」)のみに表れることになる。最後の「転写」では、すでにメレンドルフの特徴をほとんど消し去っているため、もはや修正の域を脱している。このような手法を取ると、満洲文字への復元が困難になるため、資料の紹介等にはあまり向いていない。

以上、いくつかの翻字例を示したが、本稿の目的は翻字案を提案する点にはない。あくまでも、これまでの翻字・転写がなぜ研究者ごとに異なるのかを探るのが主眼である。メレンドルフのように、漢語音専用の表記を他の一般の満洲語表記と区別する翻字を目指すか、あるいはそのような事にこだわらずに、文字組織全体の整合性を重視した翻字を行うか、その兼ね合いの違いが種々の翻字案を生み出した原因と思われるのである。

5) 中村雅之(2008),「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」,『KOTONOHA』65.